岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要第7号（2022） 57 － 66

大学生の英語リサーチペーパーライティングにおける文献参照の一考察

五十嵐　潤美

Citation practices in college students' paper writing: a case study

IGARASHI Masumi

要旨

本研究は日本の大学 2 回生が初めて書く英語によるアカデミックペーパーにおいて、文献参照をどのように行っているかを分析したものである。分析には先行研究で提示された 5 種類の指標を用いた。その指標とは citation category, integral/non-integral, reporting structure, rhetorical functions, writer’s stance である。その結果、対象ペーパーの全体の傾向は、同じく学生のペーパーを対象とした類似研究とほぼ共通した特徴を示していることが分かった。また、ライティング経験がより高い対象を分析した先行研究とは、若干の相違点が認められた。

キーワード

Academic writing, citation practices, student paper

1.はじめに

英語アカデミックライティングを初めて学ぶ日本の大学生にとって、参考文献の効果的な使い方と正確な記述は、最も難しい課題の一つである。自分の主張のサポートとして論理的かつ妥当な引用やパラフレーズが求められる点は日本語でも英語でも同様であるが、英語という外国語の場合は当然ながら難易度が高いと言ってよい。また、日本語のレポートにおいては、参考にした文献のリストを巻末につけるだけで許される場合もあるが、英文のレポートでは、APA などのスタイルが参考文献の記述方法を細かく規定しており、その正確性が重要となる。上記のような課題が高校教育で教えられることはほとんどなく、大学英語特有の課題である。

しかしながら、参考文献の参照こそが、一般の英語ライティングとアカデミックライティングとを分かつ重要な要素であり、これをマスターすることなしに専門課程での英語ライティングをこなすことはできない。Hyland は文献参照の重要性を考察した論考の中で、研究者 (書き手) は自らが先人の研究に負っていることを認めることによって、特定の研究コミュニティもしくは方向性に沿って研究していることを示すことができ、自らの研究を位置づけたり、また信頼できる書き手としての人格を確立したりすることができると指摘している（1999; 2000）。つまり文献参照はその研究の妥当性を担保し、評価を可能にする重要な要素と言える。

このような役割を担う文献参照のスキルを大学の基礎科目で身につけることの重要性は

明らかであるが、その難易度ゆえに、教える側としても課題は大きい。まず学生の文献参照の傾向を把握し、指導方法の可能性を探らなければならない。本研究は、先行研究によって提示された文献参照分析の指標を使って、学生のペーパーに見られる傾向を考察しようとする試みである。

2.背景

分析の対象としたペーパーは、2018 年度の本学 2 回生が「英語コミュニケーション６ アカデミックリーディング・ライティング」という必修科目において最終課題として提出したものである。この科目は学術的な英文の読み書きを学ぶもので、最終課題は各々が自由に選んだトピックについての 1000 語程度のリサーチペーパーを書くことであった。

学生にとって、当該ペーパーは初めて書く英文のリサーチペーパーである。日本の多くの学生と同じく、本学学生のほとんどが、高校生の時にまとまった英文を書いた経験に乏しい。そのため、本学では 1 回生必修科目「英語コミュニケーション３　ライティング」で、基本的な英語パラグラフの書き方から始めて、短いエッセイを書くところまでを学び、2 回生の当該科目において、1000 語程度のリサーチペーパーを書きながら、アカデミックライティングの基礎を身につけるというプログラムとなっている。内容はトピックの絞り込みや参考資料の探し方から APA によるスタイルの整え方に至るまでと網羅的なものであった [1]。筆者は 2018 年度に 1 クラス 40 人程度のこのクラスを 4 クラス担当した。学生のレベルは 4 クラスとも TOEIC500 点台程度である。また教科書には Macmillan 社の Writing Research Papers: from Essay to Research Paper を使用した(Zemach et al., 2011)。

この 15 週にわたって開講された科目で、筆者が文献参照指導中心の授業をしたのは 3 回程度であり、決して十分であったとは言えないが、初めてのアカデミックペーパーライティングに必要な最小限の内容をカバーした。主たる内容は、quoting と paraphrasing ならびに APA による参考文献の記述である。quoting の場合は、quotation 個所の特定、quotation を導入するためのフレーズや伝達動詞、quotation mark、最後に文末(in-text citation)ならびに参考文献一覧(references)への記載を練習した。Paraphrasing の場合は、paraphrase 箇所の特定と paraphrasing の練習、paraphrase 導入フレーズや伝達動詞と文末(in-text citation)・参考文献一覧(references)への記載を練習した。さらに “quoting or paraphrasing?” の判断方法を学び、quotation の必要以上の多用には特に注意を促した。導入フレーズにおける reporting verb の選択によって書き手のスタンスがどう変わるかについても指導した。また、最低 3 本の参考文献を使い、そのうち少なくとも 1 本は英文で書かれた学術論文であることを、最終課題の条件とした。

以上のような指導を経て、最終的に提出された 160 本近くの学生ペーパーの中から、今回の分析用に 10 本を選んだ。選定基準は A, B, C, D の 4 段階評価によって A 評価を得たものであり、かつ本研究への協力を承諾しているということである。ここで A 評価という

のは、必ずしも文献参照に関する評価だけではない。ペーパー全体の論理的な構成、thesis statement や topic sentence の明瞭性、サポートの説得力など多くの評価ポイントを総合した結果である。A 評価を得たペーパーはこれらの点において高得点を得たもので、文献参照に関して特に優れていたというわけではない。

結果として、様々な専攻分野の学生のペーパーを選ぶこことなった。表 1 は分析対象としたペーパーの学生筆者の所属学部、ペーパーのトピックに選んだ分野、最終的な文献参照件数(文献数ではない)である。ペーパーのトピックは自由に選ばせたが、自分の専攻に近いトピックを選んだ学生もみられる。英語の学術論文を参考資料として読まなければならないため、ある程度背景知識があるトピックを選んだと思われる。また、別の科目でリサーチ中のトピックがあれば、それを一部使うことを許可したことも要因であろう。この 10 本のペーパーに限っていえば、理系のトピックに文献参照が比較的少なく、人文社会学系のトピックに多い傾向が見られる。しかし、サンプルが少ないため、これ以外の学生全体のペーパーのトピックと文献参照件数を見なければ、確定的なことは言えない。

	所属学部	ペーパーの トピックの分野	文献参照件数
学生 01	文	Psychology	23
学生 02	教育	Public Health	11
学生 03	教育	Environment	9
学生 04	法	Law	27
学生 05	経済	Economics	15
学生 06	理	Physics	8
学生 07	理	Nutrition	9
学生 08	工	Health	16
学生 09	環境	Economics	10
学生 10	環境	Environment	13

表１　分析対象のペーパーの学生筆者の所属学部、選択した主題のトピック分野、
ならびに文献参照件数

３．分析方法

先行研究によって提示された文献参照分析の指標を用いて、対象ペーパーを分析した。使用した指標は、文献参照の形式(surface form)、修辞的機能(rhetorical function)、書き手のスタンス(writer’s stance)の三つである。このうち形式については更に category, integral/non-integral, reporting structure に分けられる。つまり、以下の合計 5 つの指標を使って分析す

る。

1) citation category

Hyland によって提示された分類で、どのような形式で参考文献を自らのライティングに取り入れたかをみる （1999；2000）。カテゴリーは「直接引用(短文) direct quotation (brief)」「直接引用(断片的・語句のみ) direct quotation (fragment)」「ブロック引用(長文、パラグラフなど) block quotation」「要約 summary」「一般化(複数のソースから) generalization」の 5 種類に分けられる。

2) integral/non integral

Swales が提示したように、integral は、参照する先行研究の筆者の名前が文中に含められている場合である (1990)。研究の主体 messenger に注目していると解釈できる。逆に non-integral の場合は、先行研究の筆者名はカッコの中、もしくは注の中だけに示される。研究主体ではなく研究内容 message に重点が置かれている。

3) reporting structure

伝達動詞 reporting verbs と前置詞句による伝達 prepositional phrases の二種類を抜き出す。Hyland（1999; 2000）や Lee et al. (2018)などのように大規模なコーパスや多数のサンプルを用いた分析においては分野ごとの頻出伝達構造が明らかになるが、本研究においてはサンプルが少ないため、学生が多用する伝達動詞、伝達の前置詞句を抽出するにとどまる。また同様の理由から Lee et al. (2018)のような research noun と writer noun の抽出もここでは行わない。

4) rhetorical function

参照がどのような修辞機能をしているかを Petrić (2007) による以下の 9 類型を使用して分析する。

a. attribution (参照した情報の出典を示す)
b. exemplification (筆者の論点を例示する情報を示す)
c. further reference (更なる情報を提供する文献を示す)
d. statement of use (論考にあたり使用した文献を示す)
e. application (筆者の議論を当てはめて考察するのに使用した情報)
f. evaluation (評価の対象とした情報)
g. establishing links between sources (複数のソースを比較対照する)
h. comparison of one’s findings or interpretation with other sources (筆者の議論等を他者の議論等と比較対照する)
i. other (機能が明らかではない場合を含む)

5) writer's stance

参照する文献に対する書き手のスタンスを Coffin (2009) による以下の 4 類型を使用して分析する。

a. acknowledge (情報に対する評価の要素はなく中立の立場を示す)

b. distance (情報への距離を保ち一定程度の疑義を示唆する)

c. endorse (情報に対する賛意を示す)

d. contest (情報に対し批判もしくは拒否の姿勢を示す)

以上である。

上記の指標分析で得た結果を適宜類似の先行研究の結果と比較する。比較対象とするのは、80 本の熟達した書き手の論文やインタヴュー記事を分析した Hyland (1999; 2000)、第二言語として書かれた 8 本の高評価修士論文と 8 本の低評価修士論文を分析した Petrić (2007)、同じく第二言語で書かれた 6 本の学部 3 回生によるペーパーを分析した Wette (2017)、同じく第二言語で書かれた 100 本の学部 1 回生のペーパーを分析した Lee et at. (2018) である。

3.結果と議論

1) citation category

今回の対象ペーパーでは summary が最も多く使用されたカテゴリーであった。表 2 は 5 種類の分類に当てはまる文献参照がそれぞれのペーパーに何回登場したかを示している。summary は全体の 86%となっており、次に多い direct quotation - brief の 12%に大きく差をつけている。10 人の内 4 人の学生は全ての文献参照が summary であった。Block quotation と generalization は全くなかった。第二外国語としての英語で書かれた学生ペーパーを 100 件分析した Lee et al.の研究でも、同様に summary が最も多く 88%で使用されたカテゴリーであった（2018）。経験豊富な書き手のサンプルを分析した Hyland の研究においては、学生より generalization の頻度が増えるものの、やはり summary が最も多い (1999; 2000)。本研究のサンプル数は少ないが、サンプルの多い類似研究と同じ傾向を示していることで、初学者にとって summary は使いやすいカテゴリーであることが分かる。

加えて、アカデミックライティング初学者にとってパラフレーズの難易度は高く、より使いやすい direct quotation を多用するかもしれないという危惧から、授業において「なるべく内容を summarize した paraphrase を使うように」という指導をした。この点については、Lee et al. の研究においても同様の指導があったため、似た傾向が出た可能性は大きい(2018)。また、参考文献が日本語である場合、逐一翻訳して direct quotation するよりは、内容をまとめて summary として参照した方が、誤訳も避けられ、使いやすかったということも考えられる。

2) integral/non integral

integral と non-integral の両方の例が見られたが（表３）、integral の方がやや多い傾向にある。Lee et al.のサンプルでも integral が多いが、その割合は 53%であり、本研究との差

	Direct quotation		Block quotation	Summary	Generalization
	Brief	fragment			
学生 01	0	0	0	23	0
学生 02	0	0	0	11	0
学生 03	0	0	0	9	0
学生 04	2	1	0	24	0
学生 05	3	2	0	10	0
学生 06	2	0	0	6	0
学生 07	4	0	0	5	0
学生 08	0	0	0	16	0
学生 09	5	0	0	5	0
学生 10	1	0	0	12	0
計	17	3	0	121	0

表 2　文献参照カテゴリー

は大きくない (2018)。integral と non-integral の使い分けは、どれだけ引用文献の筆者に重きを置くかである。しかし、表 1 に見られるように、必ずしも学生の専攻分野と選んだトピックの分野は一致していないため、未知の分野の研究者について知識があったとは考えにくい。Lee et al. の研究では、アカデミックライティングの標準指導において integral の

	Integral	Non-integral
学生 01	16	7
学生 02	8	3
学生 03	0	9
学生 04	15	12
学生 05	10	5
学生 06	4	48
学生 07	8	1
学生 08	16	0
学生 09	7	3
学生 10	0	13
計	84 (59%)	57 (40%)

表 3　Integral/non-integral form

使用が一般的であることの影響を示唆している (2018)。しかしながら、non-integral の方が少ないとはいえ、4 割を占めていることから、別の原因も模索する必要があると思われる。教科書のサンプルには integral, non-integral 両方が紹介されており、むしろ、それを適度に使い分けたという可能性が大きいと思われる。

3) reporting structure

表 4 と表 5 では文献参照時に使われた伝達動詞と前置詞句による伝達で最も多かったものをまとめている。Lee et al. の研究において最も使われた伝達構造として指摘されているのは、①X + verb + that clause, ②according to X, ③by X, ④in X ('s) article の 4 件であり、その内最初の 2 件が圧倒的多数を占めている (2018)。本研究でも伝達動詞の使用は Lee et al. の研究中の X + verb + that clause にあたり、最も多数である。もっともよく使われた伝達動詞は find, prove, say, reveal, show などである。サンプルが少ないため、一般化はできないが、find, say, show といった一般的な動詞は、Lee et al. (2018)とも Hyland (1999; 2000)のコーパスを使った分野毎の頻出伝達動詞とも重なる。しかしながら、学生でなく研究者の論文を使った Hyland と比較するには、もっとサンプル数を増やし、分野ごとに分析する必要があると思われる。また、前置詞句による伝達では according to が圧倒的に多かった。これは Lee et al. (2018)と同様である。学生にとって、according to は、主文に影響を与えることなしに参考文献を導入できる使いやすい前置詞句による伝達形式であることを示唆している。

6-7 回	2-4 回	1 回
find (7), prove (7), say (7), reveal (6), show (6)	argue (4), indicate (4), estimate (3), believe (2), examine (2), investigate (2), point (2), report (2), state (2)	address, expect, conclude, consider, continue, develop, explain, observe, refine, survey

表 4　Reporting structure: reporting verbs　　66 回のうち　　（　）内の数字は登場回数

according to (32), in the result of (2), in one's survey (1)

表 5　Reporting structure: preposition phrases　　35 回のうち　　（　）内の数字は登場回数

4) rhetorical functions

表 6 が示すように、Petrić (2007)による 9 類型を使って文献参照の修辞機能を調べた結果、attribution が 96.5%と圧倒的多数となった。また exemplification と application がわずか

に認められるものの、6 つの類型は 0 件であった点に注目できる。Petric (2007) と Lee et al. (2018) を見ても、attribution が群を抜いて多用されていることは共通している。授業においても文献参照の基本形として attribution を中心に指導しているため、この結果は妥当であると言える。特筆すべきは修士論文の文献参照を分析した Petric (2007)において、低評価の修士論文においては、同様の結果であったものの、高評価の修士論文においては、attribution が多いものの、他の修辞機能へも分散が見られる。経験やレベルが高いと、修辞機能の多様性も高く、より高度なスキルを要する修辞機能を使えることを示している。

	Attribution	Exemplification	Further reference	Statement of use	Application	Evaluation	Establishing links between sources	Comparison with sources	Others
学生 01	23	0	0	0	0	0	0	0	0
学生 02	11	0	0	0	0	0	0	0	0
学生 03	7	1	0	0	1	0	0	0	0
学生 04	26	1	0	0	0	0	0	0	0
学生 05	15	0	0	0	0	0	0	0	0
学生 06	8	0	0	0	0	0	0	0	0
学生 07	8	1	0	0	0	0	0	0	0
学生 08	15	1	0	0	0	0	0	0	0
学生 09	10	0	0	0	0	0	0	0	0
学生 10	13	0	0	0	0	0	0	0	0
計	136 96.5%	4 2.8%	0	0	1 0.7%	0	0	0	0

表 6　Rhetorical functions (Petrić, 2007)

5) writer’s stance

最後に書き手のスタンスであるが、表 7 が示すように acknowledge が圧倒的に多い。これが Coffin (2009) の提示した 4 類型のうち、そもそも文献参照の目的として最初に指導されるものであるため、サポートとして使いたい文献を紹介して attribution としている例が標準化している。当該分野の専門知識をまだ持たない学生筆者にとって、当該分野全体の把握を必要とする endorse と contest が困難であることは無理もないことであろう。

	acknowledge	distance	endorse	contest
学生 01	14	0	9	0
学生 02	7	0	4	0
学生 03	9	0	0	0
学生 04	27	0	0	0
学生 05	15	0	0	0
学生 06	8	0	0	0
学生 07	9	0	0	0
学生 08	16	0	0	0
学生 09	10	0	0	0
学生 10	13	0	0	0
計	128	0	13	0

表 7　Writer’s stance (Coffin, 2009)

4.結論

本研究では日本の大学生による初めての英文アカデミックペーパーの文献参照を分析した。Citation category、integral/non-integral、reporting structure, rhetorical function, writer’s stance の 5 種類の指標を使い、また先行研究の結果との比較を行った。本研究の対象ペーパーの分析結果は、他の学生によるペーパーの分析研究の結果と大きな差は認められなかった。Citation category では summary が圧倒的多数で、rhetorical function では attribution が最も多い。Writer’s stance も acknowledge に集中している。これらはいずれも文献参照において標準的なものとして指導されるものであることから、初学者においてはその指導の影響が多いと考えられる。しかし、筆者としての経験やスキルが上がると、使える修辞機能などが増えてくることなどから、高年次の学生への指導において、多様な修辞機能やカテゴリーの使用を取り入れることも有効であろう。今後はサンプル数を増やすともに、専門分野別またはライティング経験別の分析を行い、より詳しい傾向の変化の分析をしたい。

謝辞

本研究への協力を了承し、ペーパーを提供してくれた学生諸君に感謝を申し上げる。また、本研究は JSPS 科研費 19K00880 の助成を受けたものである。

[1] 現在はプログラム改編によりこの科目はなくなったが、1 回生でパラグラフからショートエッセイ、2 回生でリサーチペーパーという目標は継続中である。

参考文献

Coffin, C. (2009). Incorporating and evaluating voices in film studies thesis. *Writing and Pedagogy, 1*(2), 163-193. DOI: 10.1558/wap.v1i2.163

Lee, J. J., Hitchcock, Ch., & Casal, J. E. (2018). Citation practices of L2 university students in first-year writing: Form, function, and stance. *Journal of English for Academic Purposes, 33*, 1-11. https://doi.org/10.1016/j.jeap.2018.01.001

Hyland, K. (1999). Academic Attribution: Citation and the construction of disciplinary knowledge. *Applied Linguistics, 20*(3), 341-367.

Hyland, K. (2004). *Disciplinary Discourses: Social Interactions in Academic Writing*. The University of Michigan Press. First published by Pearson Education in 2000.

Petrić, B. (2007). Rhetorical functions of citations in high- and low-rated master's theses. *Journal of English for Academic Purposes, 6*, 238-253. doi:10.1016/j.jeap.2007.09.002

Swales, J. M. (1990). *Genre Analysis: English in Academic and Research Settings.* Cambridge University Press.

Wette, R. (2017). Source text use by undergraduate post-novice L2 writers in disciplinary assignments: Progress and ongoing challenges. *Journal of Second Language Writing 37*, 46-58. http://dx.doi.org/10.1016/j.jslw.2017.05.015

Zemach, D. E., Broudy, D. E., & Valvona, Ch. (2011). *Writing Research Papers: From Essay to Research Paper.* Macmillan.